工事中の姫路城
（写真提供：姫路市）

姫路城は半世紀ぶりの化粧直し中！

石垣に使用されている「姥が石」
（写真提供：姫路市）

みなさんは姫路といえば、必ず姫路城を思い浮かべるでしょう。姫路城が世界文化遺産であることも知っている人は多いはずです。しかし、平成５年（1993年）に奈良の法隆寺とともに日本で初めての世界文化遺産に登録されたということは、あまり知られていないかもしれません。

姫路城が世界遺産になった理由は、「その美的完成度が我が国の木造建築の最高の位置にあり、世界的にも他に類のない優れたものであること」「17世紀初頭の城郭建築の最盛期に、天守群を中心に、櫓（やぐら）、門、土塀等の建造物や石垣、堀などの土木建築物が良好に保存され、防御に工夫した日本独自の城郭の構造を最もよく示した城であること」などが挙げられます。

しかし、姫路城の魅力はそれだけでは終わりません。姫路城では、昔から数多くの伝説やドラマが秘められているのです。「宮本武蔵の妖怪退治」、「播州皿屋敷のお菊井戸」、「姥（うば）が石」などなど多くの言い伝えがあります。つまり、姫路城はすばらしいハード面と興味深いソフト面を兼ね備えた世界文化遺産であり、訪れる方にもその魅力をぜひ知っていただきたいと願います。

言い伝えのうち特筆すべきは「姥が石」。羽柴秀吉が姫山に三層の天守を築いていたときのこと、城の石垣の石がなかなか集まらず、苦労しているという話が広まっていました。老婆がそれを聞き、「せめてこれでもお役に立てば」と古くなった石臼（いしうす）を差し出すと、秀吉は大変喜び、石臼を現在の乾（いぬい）小天守（こてんしゅ）北側の石垣に使いました。この話はたちまち評判となり、人々が競って石を寄進したため、工事が順調に進んだといわれるものです。この言い伝えにちなみ、平成の「姥が石」愛城募金として平成21年から実施している姫路城大天守保存修理事業の募金活動の愛称としています。

現在の姫路城はというと、前述しました大天守保存修理工事の真最中で、その天守閣は素屋根（仮の屋根）で覆われつつあります。工事の進み具合で多少の変動はありますが、次に皆様の前に白亜の美しい外観を現すのは、平成27年３月ごろの予定です。

姫路に行こうと思っていた人は残念だなと感じられるかもしれませんが、素屋根に覆われた姫路城を見る機会はそうはありません。これは約半世紀ぶりの大事業なのです。前回は昭和30年代に大修理が行われ、これは昭和の大修理といわれています。今回の修理期間中においては、素屋根内に設けた見学用スペースまでエレベーターで昇ることができ、瓦の葺き替えや漆喰塗り等職人の匠の技を間近で見学することができます。

また、それ以外にも姫路城内には四季折々の情景が楽しめる千姫ゆかりの西の丸庭園など見どころが満載です。この改修中の姫路城を訪ねて、ぜひ姫路へお越しください。

（協力／姫路市）